



根本的経験論、もしくは方法的エポケーなき現象学 : ジェイムズにおける「存在と無」の問い

嘉指, 信雄

(Citation)

現象学年報, 11:217-226

(Issue Date)

1996

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003253>



根本的經驗論、もしくは方法的エポケーなき現象学

——ジェイムズにおける「存在と無」の問い——

嘉 指 信 雄

ジェイムズ哲学を現象学的視座から捉え直そうとする「ジェイムズ・ルネッサンス」の種は、フッサール自身によって蒔かれたものといえよう。『危機』書の終わり近く、フッサールは唐突にジェイムズに言及している。

「わたしの知るかぎり、fringes [縁量] という名のもとに地平現象に注意したのは、ウィリアム・ジェイムズただひとりであるが、彼は志向的対象性や含蓄についての現象学的に獲得された理解もなしに、どうしてこれを問題に示えたのであろうか。しかし、もしこうしたことがなされ、世界意識がその無記名性から解放されたとしたら、それは、すでに超越論的なものへの突入が行われたということである」。

こうしたフッサールによるジェイムズの鋭敏な現象学的洞察力の認知に応えるかのように、すでに少なからぬ比較研究がなされ、ジェイムズがフッサールに及ぼした影響の大きさが明らかにされている。しかしながら我々としては、こうした比較研究の成果はひとまず「括弧に入れて」、ジェイムズによる現象学的領野への突入に対してフッサールが示した「戸惑いまじりの驚き」の意味を考えてみることから、ジェイムズ哲学の現象学的意義の考察を新たに試みたいと思う。

フッサールにおける「現象学的還元への動機」という問題は、フッサール現象学の核心に関わる大問題の一つである。あれほど執拗な「現象学的還元」の遂行へとフッサール

ルを駆り立てたものは一体何であったのか？ フッサールは最後には還元の徹底的遂行を「宗教的回心」にも例えうる意識態度の根本的転回とみなすに至った事実を考えると、この問いに対して方法論的要請の観点からのみ答えても十分とは言えないであろう。

このように見るとき、「現象学的還元への動機」を問うことは、ただ単にその方法論的意義についてだけでなく、遂行する者の存在意識をその根底から変容せずにはいないその実存的意義についても問うことを意味する。同じ理由で我々は、ジェイムズに向けられたフッサールの問いを、単にジェイムズの独創を際立たせるための修辭疑問として受け流すのではなく、他ならぬ「地平」概念によって現代哲学に新たな「地平」を切り開くことを可能ならしめたジェイムズ哲学の内的ダイナミックスを浮かび上がらせる格好の探照灯として取り上げたい。

ジェイムズは、『心理学原理』や『根本的経験論』において経験の「現象学的」記述を展開する時、フッサールにおいては「現象学的に還元された」意識状態を獲得するためには不可欠な予備手続きと見なされている「エポケー」を遂行する必要など全く感じていないかの如く、具体的記述にすぐさま取りかかっている。

しかしながら、ジェイムズの最も初期の著作の一つは、かなり早い時期にジェイムズは、反省的「還元」の問題に直面していたことを疑いもなく物語っている——当然のことながら、フッサールによって定義された現象学的「還元」の意味とは、ずれるところが大きいのであるが。その著作とは、一八七九年に『マインド』誌に発表された論文、『合理性の感情』である。ジェイムズ自身がこの論文に決定的な意義を認めていたことは、三六歳の時に書かれたジョサイア・ロイスへの手紙の中で、「今までに自分が書いた唯一まともなもの」と述べていることから明らかである。^②

この論文の冒頭、ジェイムズは非常に基本的な問いを投げかける——「哲学者たちはみずからの任務としてどんなことを成し遂げようとするのか？ また、彼らは一体なぜ哲学するのか？」ジェイムズによれば、それは、「各人めいめいが生来、自分の頭の中で思い巡らしているかなり混沌とした見解よりは全般的により合理的な物事の枠組みについての考想に達すること」を哲学者たちが望んでいるからだ。^③

ならば、哲学者に彼のそうした目的が達せられたことを教えてくれる「主観的」な徴は何か？ ジェイムズによれば、それは、「現在の瞬間についての充足感、それが絶対的

あるという感じ——それを解明したり説明したり、釈明したりする必要が一切見あたらない状態」に存する「合理性の感情」である。

しかし、「合理性の感情」が達成されても、精神自身がたゆまず吐き出す懷疑の息によってたちまち追い散らされてしまうことになる。「合理性の感情」は、理論的精神が自らの本性に忠実である限り、つまり、歩一步と未知の領域に踏み込み、かつ絶えず自らの行程を振り返ろうとする衝動に忠実である限り、「安定した」ものであり続けることはできない。我々の精神は、「その経験の各項目の傍らに他なるもの(an other)を認める過程と緊密に結びつけられている」からである⁽⁴⁾。

そして「リダクティヴ」が、こうした反省的精神にとって永遠に「他なるもの」「より以上なるもの」(the beyond)にジェイムズが与えた名前である。

或るひとまとまりの想念にとつての「リダクティヴ」とは、「後に続いて生起して来て、それを相対化し脱合理化(derationalize)してしまう、さらなる諸考察」のことである。精神に付きまとい続き、悦に入つた「合理性の感情」から確信を奪い、不安な動揺状態へと突き落としてしまう(reduce)。(5) この「他なるもの」は、問題となる「合理性の

感情」の対象が何であるかによって様々な形態を取りうる。ジェイムズが列挙するのをそのまま挙げてみると、

「したがって、絶対存在のリダクティヴは非有である。つまり、絶対存在が伴う『他なる可能性』の観念である。

絶対物理のリダクティヴは、すべての物質的事実も一つの精神の中の諸表象だとの考えである……絶対知識のリダクティヴは、懷疑の恒常的可能性、言いかえれば、今抱いている思念も次の思念によってきつと修正されることになるだろうとの観念である。こうした観念は、とどのつまり、ヌーメノンの世界が存在して、我々が知っていると思いついでいる世界をあざけているのだという観念に帰着する。我々が何を考えようと、常になんらかのリダクティヴが完全な理論的正当性をもって我々の思念のすぐ上を徘徊し、くじいてやろうと身構えている」⁽⁶⁾。

ジェイムズの「リダクティヴ」概念は、我々の諸信念を「相対化」し、それらの「絶対的」確実性から「慣れ親しんだ」装いはぎ取ってしまう、いわば、様々な「反定立的」視点を含む。ジェイムズによれば、

「絶対的なものとは、いまだに超越されたり、批判されたり、相対化されていないものの謂いである。しばしば想定されるような、何か神髄に関わるもの、何か到達しが

たいものなどでは全くなく、生において實際的に最も慣れ親しんでいるものなのだ。どんな思念も、それを心に抱いている時やそれに基づいて行為している時は、我々にとって絶対的なものである。思念は、後の反省の光の中で初めて相対的なものとなる」。

したがって、「リダクティヴ」の役割は、我々の世界からその「慣れ親しんだ」、「合理的な」相貌を奪い取ってしまうような反省の懷疑的な眼差しによって様々の形をとって演じられうる。意識を超越して実在するかのように見える「物質的諸事実」を「一つの精神の中の諸表象」へと還元してしまふ「リダクティヴ」は、深甚な影響を及ぼすものではあるが、「リダクティヴ」が取りうる一形態と捉えられているに過ぎない。この意味において、ジェイムズの「リダクティヴ」概念は、ごく控え目についても、フッサールにおける「現象学的還元」の概念よりは意味内容がはるかに広い。後者は、とりわけ自然的態度における世界の超越的存在の「一般的定立」を「括弧に入れ」、「純粹意識」の領野を獲得することに照準を絞った方法論的概念である。

しかしながら、ジェイムズの「リダクティヴ」概念には、現象学的な観点からして極めて注目すべきところがある。「リダクティヴ」は、種々様々の形態を取りうるが、「合理

的」な思念を越え出てしまふ「他なるもの」を追求め精神の運動そのものの中にその共通の起源を有すると見なされている点である。あるいは、逆の見方をすれば、自らの思念の「合理性」を翻って反省するよう、抗い難い眼差しを精神に投げかけてくるのは「他なるもの」、「より以上なるもの」そのものである。

そして、ジェイムズが「より以上なるもの」や「他なるもの」といった表現によって意味しているところは、今や改めて言う必要もないであろうが、広い意味での現象学的な「地平」概念に包摂されうるものである。しかしここで興味深いのは、フッサールにおいては、「還元」は哲学的主観が自由になし、かつ自由に止めうる方法的手続きと捉えられているのに対し、ジェイムズにおいては、思念にとって構造的に不可避的な「より以上なるもの」の現前と「リダクティヴ」の生成との間に存する絶えざるダイナミックな相関関係、つまり「還元の受動性」とも呼べる事態が問題になっていることである。

だが、ジェイムズの「リダクティヴ」概念も、ひとを哲学的思惟へと引き入れる典型的経験の一変奏として見なしうるのではないか？ そうした疑問が提示されるかもしれない。かの「驚異」、かの「懷疑」を通じての哲学的覚醒と

いう普遍的経験の一ケースを表明したものととして片づけるのではないかと。しかしながら我々は、幾多の哲学者たちが彼ら独自の視点やスタイルを確立するに至ったのは、まさにそうした「普遍的」経験を通じてであったことを忘れてはならないだろう。「現象学的」哲学者たちの場合は特にそうであると言えよう。

それでは、「リダクティヴ」の現象によって突きつけられた問題に対してジェイムズが取った基本的姿勢はどんなものであったか？ ジェイムズの答えを彼自身の言葉で聞いてみよう。次の引用中、「既知事項」とは、ジェイムズ言うところの「形而上学的既知事項」、つまり、「明晰さと統一性が友好的に手を結ぶことができる」ような仕方で世界を「合理化」しようとする精神の努力の所産を意味する。⁽³⁾

「もし、既知事項とリダクティヴを和解させることがヘーゲル流の同一化方式でできないのなら、理論的観点からいって哲学者の課題とは、既知事項が恐れなど知らず再び泰然としていられるよう、『リダクティヴを払い除ける』(exorcise the reductive) ことである」。

ジェイムズは、様々なリダクティヴを「払い除ける」ために哲学者たちが考案してきた処方箋のいくつかを列挙した後、次のように述べる。

「しかし、もし哲学者が彼の既知事項を守るために十分な『払い除け処方箋』が見つけられないならば、唯一哲学者にできることは、ある時点においてリダクティヴは『見て見ぬふりをする』(blink) ことにし、既知事項は究極的なものとして見なすことによって、観想生活へあるいはそれに基づく行動生活へ進むことである」。

このことは、存在論的可能性としての「絶対的な無」の概念の場合にとりわけ当てはまるとジェイムズは考える。この存在論的「リダクティヴ」に対して有効な「払い除け処方箋」は存在しない。したがって、我々はきっぱりと認めなければならぬ、「全き無ではなく、なぜ存在が存在するのか」というかの問いに對峙する時、理論的合理性は乗り越えがたい究極的な限界、精神が挑み得る理論的「地平」の果てに立っているのだということ。

しかしながら、神秘主義的な精神にとっては、この理論的袋小路は、まさにそこから「より以上なるもの」の闇の中へと渾身に満ちた想像力の翼を広げて飛び立つ懸崖となる。実際ジェイムズは、「存在の存在」という謎を「解決」はできぬにしても「解消」する可能性を神秘主義の中に認める。この世界に聖なる秩序を視る神秘的な心の持ち主においては、「存在論的な感動が魂を一杯に満たすので、存在

論的思弁はもはやそれに重ねて疑問符の帯を存在の周りにめぐらすことがでなくなる」のだと。

「何故？」とは問わずに、存在があるがままに心で受けとめる神秘主義に大きな魅力を生涯感じ続けたジェイムズではあるが、少なくともこの時点においては、彼の哲学的批判精神が神秘的想像力の無条件的な支配に屈するのを彼に思い止まらせる。かくてジェイムズは断じていわく。

「そこでもし人が、神秘の方法は論理的適切性を欠いた言い抜けであり、一時凌ぎの膏藥とはなりえても治癒はもたらしえないこと、ヘーゲル流の方法は虚偽であること、したがって非有の觀念 (the idea of Nonentity) は決して払い除けられもしないし、一体化することもできないことに同意しなければならぬとすれば、経験主義が究極的哲学となるであろう」。

ジェイムズ理解するところの経験主義が「究極的哲学」の地位を与えられるべきなのは、なんらかの「究極的な」真理を擱んでいるからではなく、反対に、存在は人間理性の限界を越えた「究極的所与」であることを受け入れるからである。言いかえると、ジェイムズの経験主義は、理論的精神にとって乗り越えがたい究極的地平としての「存在の問い」を、いわば、視野の縁量にしかと認めはするが、

神秘的な心がそこから飛び去って行ったこの世の地平を歩み続けんがため、この究極的な存在論的「リダクティヴ」は「見て見ぬふりをする」ことを選択するのである。

しかしながら、やはり問いは残る。あらゆる「リダクティヴ」の中でも最も強力な存在論的「リダクティヴ」に対する哲学の無力を告白した後、「究極的哲学」としての経験主義がなすべき課題とは何か？ 理論的合理性のこうした「袋小路」から抜け出す手立てはあるのか？

この論文の終わりでジェイムズは、「『実践的』な局面において合理性の感情を形作るのは何なのか」を探索することによってこれらの問いに取り組む意向を表明している。そうした探求に対するジェイムズの戦略的要諦は、人間理性を「純粹に理論的な合理性」の塔から解放し、実践的な生の地平へと、つまり、「感覺的印象」、「感情」、「行動」がなす円環の中へと戻してやることである。

約束された続編は、約三年後、一八八二年に「合理性、活動、そして信念」のタイトルで『プリンスストン・レビュー』に発表される。さらに、一八九七年にジェイムズが初期の論文を集めて『信じる意志』を出版する際には、『マインド』論文と同じタイトルをもつ論文の主要部分として収録されることとなる。このことは、ジェイムズの著作の中には「合

理性の感情」というタイトルをもった論文が二つ存在することを意味する。つまり、『マインド』に掲載された最初の論文、および最初の論文とその続編を合体して作られた、『信じる意志』収録の論文である。

こうした一見些末な文献目録的注解が必要なのは、最初の『合理性の感情』論文がその続編と合体された時、重大な変更がテキストに施されたからである。いくつかの重要な表現に修正が加えられただけでなく、最初の論文の少なからぬ部分、実際およそ三分の二に及ぶ部分が切り捨てられてしまったのである。

決定的に大事な点は、『リダクティヴ』や『リダクティヴを払い除ける』処方箋、および『リダクティヴを見て見ぬふりをする』必要性といった三つ組の中心概念をジェイムズが詳論している部分がほとんど完璧に切り捨てられてしまっていることである。一般読者には遙かにより広く知られている『信じる意志』のテキストから、これらの概念に関わる表現が跡形もなく姿を消してしまったという訳ではない。しかし、おそらくは読み易さへの配慮からなされたであろうテキストの大幅な短縮が、結果として、『リダクティヴ』概念をめぐるジェイムズ独特の思考が彼の「現象学的」哲学の形成過程において占めている中核的な位置を

覆い隠してしまうことになっていると言えよう。

『リダクティヴ』をめぐる三つ組概念の内的ダイナミックスは、ジェイムズが「無比なるリダクティヴ」(reductive sui generis)と呼ぶ概念、つまり、あらゆる地平を包み込む絶対的地平である「非有」の概念の場合に最も鮮明に表れる。この究極的「リダクティヴ」は他のいかなる「リダクティヴ」とも水準を異にする。ただ単に最も強力な「リダクティヴ」であるというだけでなく、それが存在自体を「包み込んで」しまい、その結果、他のいかなる「リダクティヴ」が有する、信憑を相対化してしまう力さえ、どうでもよい事柄に帰してしまう(reduce)からである。ジェイムズは述べている。

「ジョーベンハウエルの言うとおり、『決して止まることのない形而上学の時計を動かしている不安は、この世界の非存在がこの世界の存在とまったく同様に可能だという意識にはかならない』。そこで、非有の観念は、最も微妙かつ深淵な意味での哲学的渴望の生みの親と呼んでいいだろう。絶対存在は絶対の神秘である。絶対存在は自足(selbstständig)しているものの、自明(selbstverständlich)ではない。それと無との関係がわれわれの知性へと媒介されていないからである」⁽¹⁾。依然としてひとは、こうした「存在

論的」瞑想はプラグマティスト・ジェイムズの柄に合わないと思ひなすであらうか？ 若きジェイムズが彼の最も敬愛する哲学上の師であったシャルル・ルヌヴィエに宛てた私信の中には次のようなくだりがある。

「あなたの『エッセ』を読んでから、唯一重要な問いは、あらゆる問いの中でも最も深き問い、つまり、『存在と無』(Sein und Nichts)と矛盾律の間の問いであると思われる⁽¹⁵⁾」。

あたかもこの一節は、ジェイムズが「純然たる論理的リダクティヴ」(logical reductive pure and simple)の根源的重要性を悟るようになったのは、ルヌヴィエの著作を読んだが故のように読めるが、ジェイムズの「存在論的」瞑想は、外発的なものではなく内発的なものであったように見える。実際、『合理性の感情』の次のような一節は、ジェイムズの「存在論的渴望」は、その烈しさと執拗さにおいてルヌヴィエのそれをはるかに凌ぐものであったことを語っている。

「またこうした見解は、すべての硬い心の分析家や悟性人(Verstandesmenschen)の態度でもある。現代を代表する哲学者であるルヌヴィエとホジソンは、全体としての経験についてどんな説明も与えることができないとあっさり

言い切るけれども、そうした告白の唐突さを和らげようとしなければ、我々をこの無能な状態に適合させようとなしないのである⁽¹⁶⁾」。

ただ単なる事実の表明の体裁を取りながら、実際にはジェイムズは、ルヌヴィエのような悟性人はこの存在論的「リダクティヴ」をあまりに易々と、そしてあまりにきつぱりと「見て見ぬふりをする」ことに決め込んでしまうと感じていることをほのめかしている。ある意味で、これはかなり奇妙な反応だとも言える。究極的な「リダクティヴ」を見て見ぬふりをする「プラグマティックな」必要性を誰よりもよく理解しているのはジェイムズ自身ではないか？ いかなる「払い除け処方箋」も効かない究極の「リダクティヴ」を簡単に片づけてしまふ「悟性人」の流儀には、どこかしら非難すべきところでもあるというのだろうか？

「払い除け」(exorcism)という表現に象徴されるように、ジェイムズは、方法論的手続き上の問題としてではなく、むしろ実践的生活の自然的態度へと舞い戻るために乗り越えるべき障害として存在論的「リダクティヴ」の問題に直面した。しかしながら、「リダクティヴを払い除ける」という、一見逃避主義的な印象を与える表現にも拘わらず、ジェイムズはこの究極的「リダクティヴ」を人間精神にとり単

に不都合なものとして捉えていたわけでもなかった。

究極的「リダクティヴ」の眼差しにひとたび魅入られてしまった「経験主義者」とっては、それを忘却に完全にゆだねてしまうことも不可能となる。たとえ「経験主義者」が「見て見ぬふりをする」ことを選んだとしても、究極的「リダクティヴ」の遍在的な眼差しが彼の背にも絶えず注がれ続けているのを「経験主義者」は知ってしまったのである。だからジェイムズは最初の『合理性の感情』論文を事実上次のように結んでいる。

「存在はあからさまな事実 (a brute Fact) であり、存在論的驚異の感情は当然この事実全体にまわり続けるであらうが、それは永久に満たされはしないだろう。かくて驚異性もしくは神秘性は物事の本性に不可欠な属性であり、それを開示し強調することが今後ずっと人類の哲学的営みの一要因をなすであらう。いずれの時代にもそれぞれの時代に応じたヨブやハムレットやファウスト……が生み出されることだろう……これをもって我々は、純粹に理論的な合理性の全可能性を論じ尽くしたように思える」⁽²⁾

したがって、こうした存在論的「リダクティヴ」の両義的な「魔力」魅力 (charm) に對するジェイムズのアンビ

ヴァレントな態度が物語っているのは、ジェイムズにとり「理論的」合理性と「実践的」合理性の間の関係は、「合理性の感情」論文の表向きの戦略にも拘わらず、前者から後者への一方通行的な移行でも、前者の後者への決定的な包摂でもありえず、実存的な緊張をはらんだ絶えざる往還の運動であり続けざるをえないことである。

また、ジェイムズに対してフッサールが示した「戸惑いまじりの驚き」の意味を考えることを目指したこの小論から明らかとなったのは、ジェイムズ哲学の「現象学的」意義の十全なる評価は、フッサールが書き抜きを作ってまでして吸収しようとした幾多の「現象学的」閃きに満ちた「先行者」としてのみでなく、「形而上学とは何か」のハイデッガーや、「還元」の最も偉大な教訓とは、完全な還元は不可能だということ」だとした『知覚の現象学』序文におけるメルロ・ポンティの批判的「併走者」としてジェイムズを捉え直すことによって初めて可能となるだろうということである。

われわれは、「存在と無」の問いはジェイムズの哲学的思惟に最後までまわり続けた究極的地平であったことを示す一文を、未完の遺稿『多と一』のための序文章稿から引用することで、ジェイムズ現象学の再評価へと向けたこの

予備的考察を終えたいと思う。

「いずこかで存在は、じかに非有に立ち向かい——黒き虚空へと切り込む。月の光漲る球体が蒼みがかった暗淵の⁽¹⁸⁾中を切り開き進むように。」

注

- (1) Husserl, E., *Husserliana*, VI, p. 267. (『モーロッソ、諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫・木田元訳、中央公論社、一九七四年、三七一頁。
- (2) *The Letters of William James*, edited by his son Henry James (Boston: The Atlantic Monthly Press, 1969), vol. I, p. 204.
- (3) James, W., *Collected Essays and Reviews*, (New York: Russel & Russel, 1969), p. 83. (『ウィリアム・ジェイムズ著作集』第三巻『信じる意志』福鎌達夫訳、日本教文社、一九六一年、八七頁。この日本教文社版『信じる意志』に収録されている「合理性の感情」論文は短縮版の方である。したがって、以下、引用箇所が『信じる意志』に含まれている場合は、福鎌氏の訳文に適宜変更を加えて使用させていただいたが、そうでない場合は

拙訳である。)

- (4) *ibid.*, p. 126.
- (5) *ibid.*, p. 130.
- (6) *ibid.*
- (7) *ibid.*, p. 129.
- (8) *ibid.*, p. 130.
- (9) *ibid.*, p. 132.
- (10) *ibid.*, p. 133.
- (11) *ibid.*, p. 134-5.
- (12) *ibid.*, p. 136.
- (13) *ibid.*
- (14) *ibid.*, p. 127.
- (15) *Letters of William James*, *op. cit.*, p. 187.
- (16) *Collected Essays and Reviews*, *op. cit.*, p. 133.
- (17) *Ibid.*, p. 135.
- (18) Ralph B. Perry, *The Thought and Character of William James*, (Boston: Little, Brown and Company, 1935), vol. II, p. 384.

(かざし) のぶお・広島市立大学)